

山田洋次監督語る

写真は毎日新聞 1 月 9 日夕刊の特集ワイド「この国はどこへ行こうとしているのか 巨大与党の下で」である。大好きな山田洋次監督が戦争と平和について、じっくりと語る。

近年、日本では嫌中嫌韓の出版ブームやヘイトスピーチが社会問題になっている。「戦前からの意識の根を引きずっているのではないか。あの戦争は差別意識の上で起きた。」物静かな語り口が変わった。「僕たちは徹底的に反省すべではないだろうか。」



12 月に公開予定の映画「母と暮らせば」は原爆で息子を失った母親の物語。被爆国・日本で、しかも東京電力福島第 1 原発の事故後に巨大与党は原発再稼働を進める。「今はなんとって経済です、という皆黙ってしまう。まずはお金だと。本当にそうだろうか。食えなきやどうしようもない、というのは俗論だと思う。子育ての時、まず金もうけを考える人間を育てようと思いませんか。正しい志を抱く若者を育てなければ、ということに誰も反対しないでしょう」

正しい志。この国の志はどこにあったのか。「世界の平和に役立つ国であり続けること。憲法 9 条に書かれているのだけれど。そこから、いろんな問題を考えてどうしていけないのだろうか」9 条を、国として、人としての志と捉える—その姿勢にはっとした。翌日、「実は語り忘れていたことがあります」とファックスが届いた（写真下）。

山田監督は 20 年ぶりの本格的な喜劇映画「家族はつらいよ」(16 年公開予定)にも取り組んでいる。不安な時代に、コメディを送りだそうとするその心が、平和な町の明かりのように胸に染みてきた。

この記事は何回も読んで、山田監督がますます好きになった。(2015 年 1 月 21 日)

「平和」という言葉を聞くとぼくは
んな風景を思い浮かべます。
夕暮れの賑やかな商店街、豆腐屋、
八百屋、靴物屋、などなどの店屋さん
並んでいてお使いにまた子どもがなじみの
菓子屋のおばさんやパン屋のおやじさんと
大声で会話を交わしている。
酒屋のおかみさんは顧客の健康をまじ、
お寺のお坊さんは檀家の幸せを念じて
鐘をつき、裏通りには寅さん映画の
タコ社長が懸命に経営するような
町工場がたくさんあって、それらの商店や
工場がなんとか黒字経営をしている。
高層マンションや近代的ホテル、巨大
スーパーではなく、そんな昔の日本人の
暮らし方こそ平和というものではないか。
安倍さんが「日本を取り戻す」と言うなら、
そんな日本人の暮らしを取り戻していただ
きたい、とぼくは切実に思うのです。
山田洋次